

I-B187

DEM・FEM結合法を用いた衝撃挙動シミュレーションについて

金沢大学大学院 学 森北一光
小松市 正 中田吉彦
金沢大学工学部 正 榊谷 浩
金沢大学工学部 正 梶川康男

1. まえがき

落石などによる衝撃荷重は一般的に規模が大きく、荷重をうけるコンクリート構造物の挙動は、一般的に規模が大きく複雑なものとなり、この現象の解明と設計法の確立が求められている。本研究では、複合構造物であるロックシェッドに対して、緩衝材として用いられている砂などの離散体の解析に適している個別要素法（DEM）と覆工などの連続体の解析に適している有限要素法（FEM）を結合させて、衝撃を受ける構造物の解析を行い、衝撃力や覆工へ伝達されるエネルギーについて検討する。

2. 解析概要¹⁾

図-1に示すように、重錘とクッション材を個別要素で覆工を有限要素でモデル化した。個別要素と有限要素の接点には質量を持たない特別な要素（結合要素）として設定し、結合要素とクッション要素の間に働く作用力を各時間ステップで求めその作用力に基づき覆工を有限要素法で解析する。

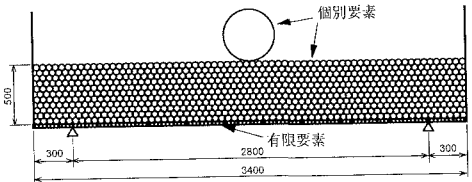


図-1 解析モデル

3. 解析結果

（1）実験値との比較 スイス連邦工科大学の土木工学科の土質、岩盤および基礎研究室の実験室で行われた実験²⁾を対象とした。図-2～図-4に重錘重量 $m=0.1\text{tf}$ 、落下高さ $H=5.0\text{m}$ のときの、それぞれ土圧衝撃力、たわみ、

支点反力の時間的変化を示す。たわみの立ち上がりが実験に比べやや遅れるが、土圧衝撃力、たわみ、支点反力に関して、解析値は実験値を比較的良好にとらえているといえる。図-5は土圧衝撃力最大値と落下高さの関係を示す。なお、図中には次式で示される落石対策便覧式を示している。

$P=2.455 \lambda^{2/5} W^{2/5} H^{3/5}$ (1)
ここに、 λ はクッション材のラメ定数($=1000\text{tf/m}^2$)であり、 W は落石重量(tf)、 H は落下高さ(m)である。これより、種々の落石条件においても解析は実験を比較的良好にとらえているといえる。

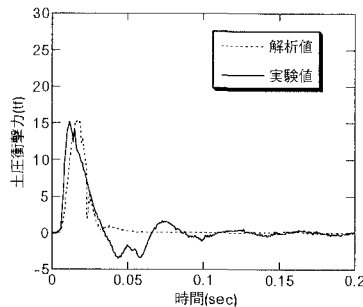


図-2 土圧衝撃力の時間的変化

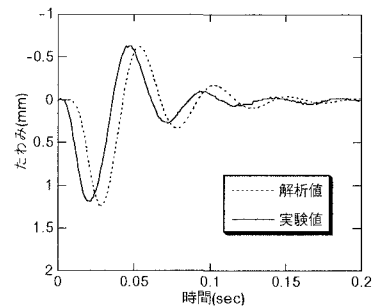


図-3 たわみの時間的変化

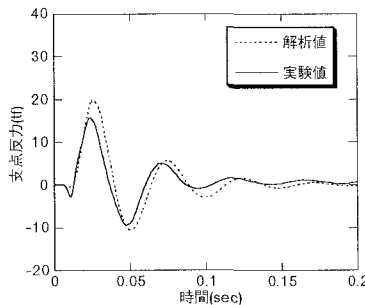


図-4 支点反力の時間的変化

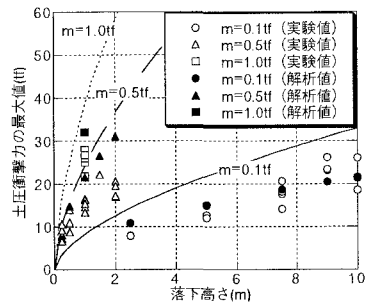


図-5 土圧衝撃力ー落下高さ

keywords: 落石, 土圧衝撃力, 伝達エネルギー

〒920-8667 金沢市小立野2-40-20 TEL 076-234-4603 FAX 076-234-4632

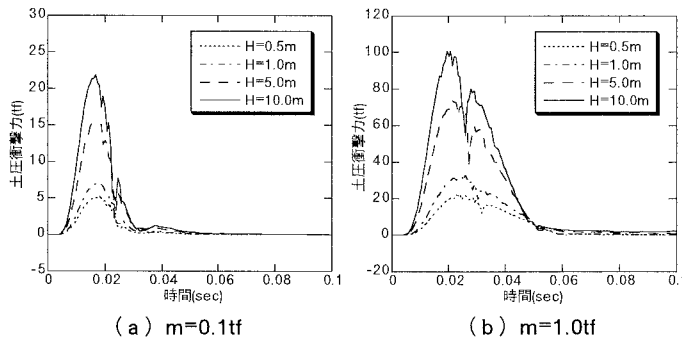


図-8 土圧衝撃力の時間的変化

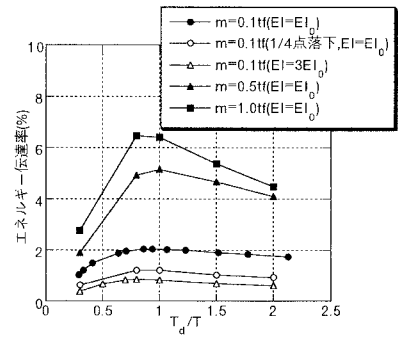


図-9 エネルギー伝達率- T_d/T

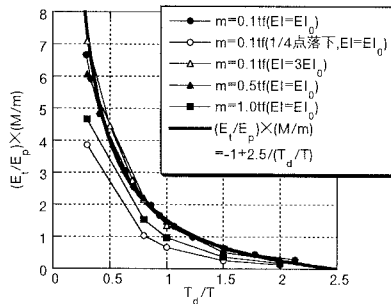


図-10 $(E_t/E_p) \times (M/m) - T_d/T$

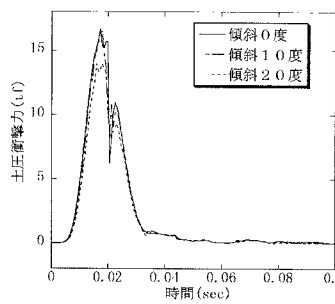


図-11 土圧衝撃力の傾斜角度の影響

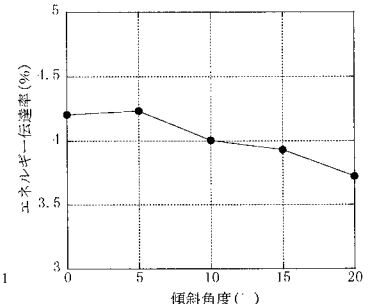


図-12 エネルギー伝達率と傾斜角度

(2) 衝撃力特性とエネルギー伝達率 ここでは、種々の落石条件を与え解析を行い衝撃力特性や覆工へ伝達されるエネルギーについて検討する。図-8に重錘重量 $m=0.1tf$, $1.0tf$ のときの各落下高さにおける土圧衝撃力の時間的変化を示す。落下高さが大きくなるにしたがい、土圧衝撃力の最大値は大きくなるが、土圧衝撃力の作用時間はほぼ一定であるといえる。図-9にエネルギー伝達率と T_d/T との関係を示す。 T_d/T が $0.8 \sim 1.0$ 程度でエネルギー伝達率は最大となっている。また、覆工の曲げ剛性が大きく、落下位置が中央から離れるとエネルギー伝達率が小さくなるがわかる。図-10にエネルギー伝達率 E_t/E_p に覆工と重錘の重量比 M/m を乗じたものと T_d/T との関係を示す。これより、次式により示される近似曲線が得られる。この式を覆工へ伝達されるエネルギーの評価式として用いることが可能と思われる。

$$(E_t/E_p) \times (M/m) = 1 + 2.5 / (T_d/T) \quad (2)$$

図-11, 図-12に覆工の傾斜角度を、0, 10, 20度と変化させたものを示す。土圧衝撃力、エネルギー伝達率ともに、傾斜角度が増すにつれて小さくなっている。

4. まとめ

(1) 本結合法を用いて、落石実験により得られる衝撃力特性を比較的良好にシミュレートできた。(2) 土圧衝撃力の作用時間は、重錘の落下高さには依存せず、重錘重量に依存する。(3) エネルギー伝達率は T_d/T が $0.8 \sim 1.0$ 程度で最大となる。(4) 伝達エネルギーを推定するための評価式を示した。(5) 覆工に傾斜を与えると土圧衝撃力、エネルギー伝達率が小さくなる。

参考文献 1) 岡田卓馬, 中田吉彦, 梶谷浩, 梶川康男: 落石衝突に対するDEM・FEM結合シミュレーションについて, 土木学会第51回年次学術講演会概要集, pp.302~303, 1996. 2) 梶谷浩, フランツ・ゲハルト: 敷砂上への落石衝突による荷重の評価に関する一考察, 第3回落石等による衝撃問題に関するシンポジウム論文集, pp.275~278, 1996.